

クロアチア障害者柔道視察報告

社会福祉法人わらしべ会 辻 和也
西畠 利彦
伊東美依那



クロアチア障害者柔道 視察報告書

2023（令和5）年10月12日

社会福祉法人わらしべ会

理事長 辻 和也

はじめに

肢体不自由者の柔道は、わたしの知る限りその実践例はあまりない。しかし、これは誠に不思議なことのように思えてならない。柔道には立ち技だけでなく寝技もあり、形の練習もある。こうしたことを応用すれば、日ごろ車いすに乗っている人でも柔道を楽しみ、その効用を得ることができると思うのは自然なことである。

今回クロアチアでその実践をされていることを知り視察に向かったわけであるが、こうした実践例を目にしてあらためてこの思いを強くした。脳性まひの参加者の練習後の集合写真を見てほしい。柔道をしてからだを動かしたあとの爽快感が笑顔に現れているように見える。

わらしべ会では肢体不自由者の柔道が1970年代ごろ医師の村井によって当法人創設前から実践され、施設開設後も中心的なプログラムのひとつとして行われてきた歴史がある。残念ながら最近は施設利用者の高齢化が進み柔道のプログラムは行われていないので、以前の資料をその実践例とするには少し隔世の感が出てしまうことが否めない。

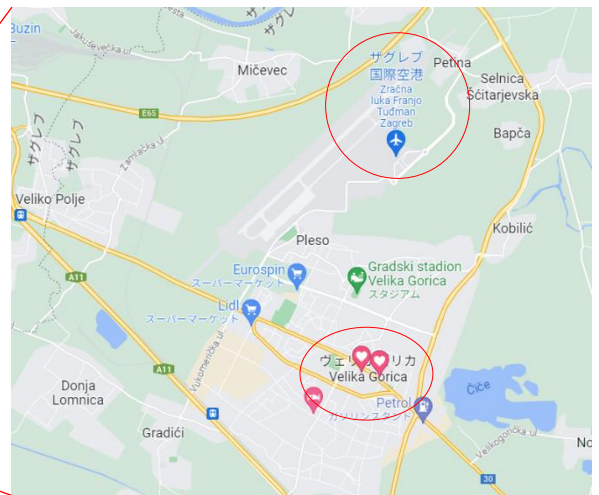
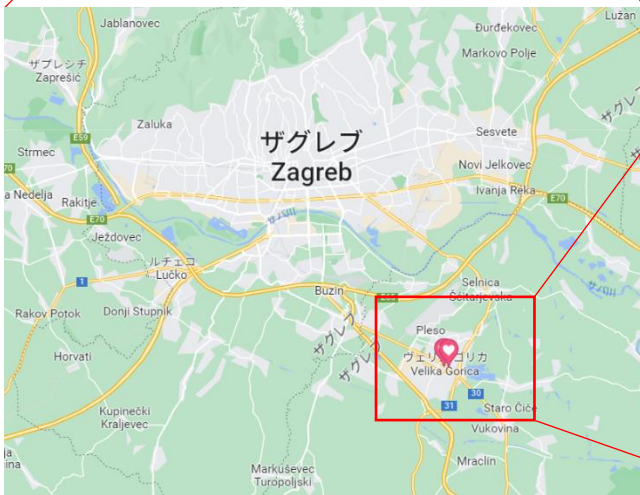
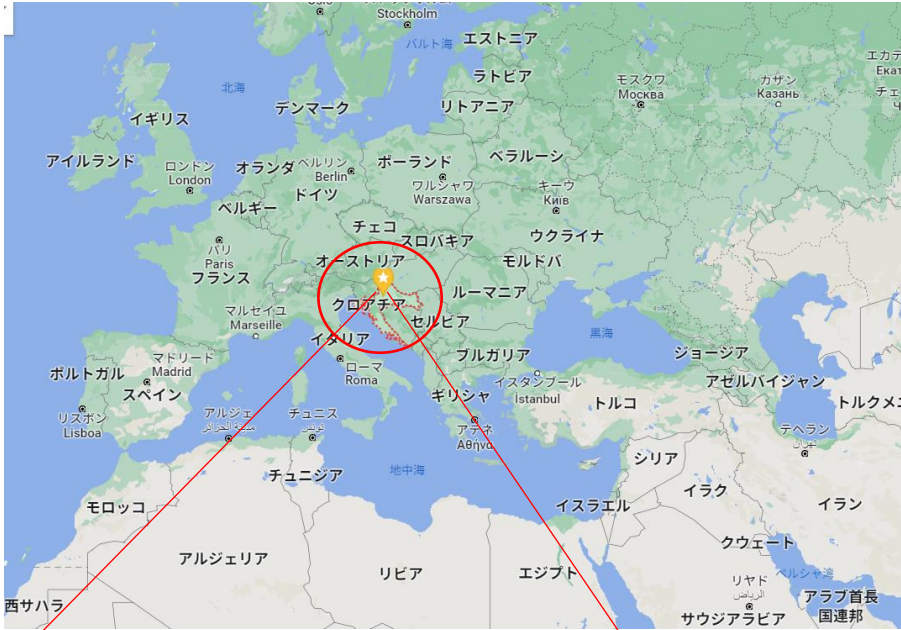
しかしながら、脳性まひのひとやそのほかの肢体不自由者にもこうした機会は上げられる可能性があることを、かつてわらしべ会で実践してきた者のひとりとして伝えたい。今回のクロアチアで見たこと感じたことの報告には使命感を感じている。障害者当事者がそこに希望を持ち、柔道指導者が興味をもって実践にトライしてもらおうきっかけになればと思う。



※なお、今回の視察内容は短い期間の主に口頭でのやり取りがもととなっているので、事実と違うこともあるかもしれない。あらかじめ報告を読まれる前に留意しておいてほしい。

概要

- ・日時：2023（令和5）年9月20日～27日
- ・目的：同国で脳性まひ児を中心とする障害者柔道を実践する女性指導者マリーナさんのもとを訪れ、その活動を視察する。
- ・場所：クロアチアの首都ザグレブ近郊（ヴェリカ・ゴリカ（Velika Gorica））の柔道場（下記地図、写真参照）
- ・参加者：辻和也、西畠利彦、伊東美依那
- ・地図



・写 真



活動場所になっている道場（体育館）。隣に消防署の訓練施設があり、その管理の柔道場とのこと。



館内の柔道場

クロアチアと柔道に関する基本情報

- ・クロアチアは旧ユーゴスラビアから 1991 年独立。
（ユーゴスラビア社会主義連邦共和国からは、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、モンテネグロ、北マケドニアが独立）
- ・クロアチアの人口は約 410 万人。面積は約 56,000 平方km。（目安として九州の約 1.5 倍。）
- ・首都はザグレブ。ザグレブの人口は約 80 万人。
- ・日本人のクロアチアに対する認識は高くないが、サッカーの 2022 年ワールドカップで日本と対戦したことで日本でも認知度が上がったと思われる。
- ・Wikipedia によるクロアチアの「スポーツ」の項目に出ているのは、サッカー、バスケットボール、テニス。
- ・柔道については、ザグレブ市内でも柔道場は多くある。またハンガリーで開催された 2021 年世界柔道選手権大会（女子 70kg 級）において、バルバラ・マティッチ選手（写真）が優勝した。
- ・現地での聞き取りによれば、柔道のほかに武道、格闘技で盛んなのは、空手とテコンドーとのこと。

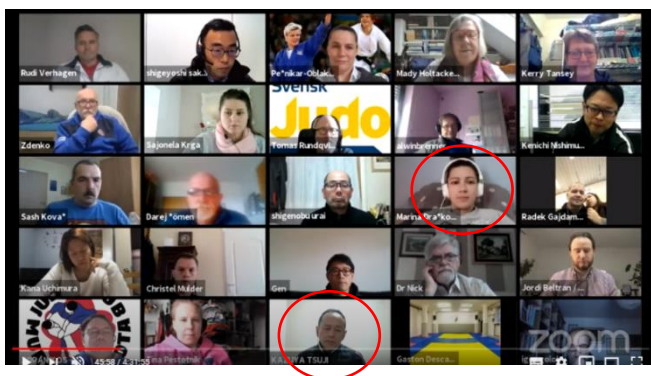


これまでの経過

クロアチアのマリーナ先生との交流は Judo3.0 のオンライン交流会に始まる。NPO 法人 judo3.0 が 2021 年 3 月 14 日（日）「インクルーシブな柔道」をテーマにしたオンライン国際セミナーを開催し、4 名の講師が報告、総勢 40 名超の国内外の柔道指導者らが参加した。このなかの講師のひとりとしてわたし（注）がわらしべ会障害者柔道の歩みについて説明したが、参加者のひとりにクロアチアのマリーナ先生がいた。

そこでお互いを知るようになり、Judo3.0 代表の酒井氏の仲介、通訳で今度はわらしべ会職員対象の ZOOM による研修が行われたのが、2021 年 6 月 24 日のことである（下記）。

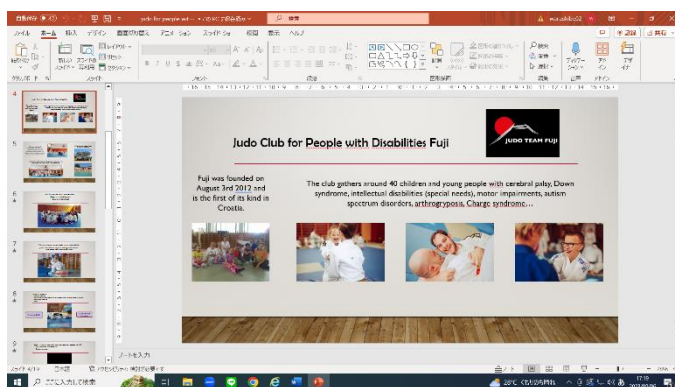
●2021 年 3 月 14 日 NPO 法人 judo3.0 主催 オンライン国際セミナー「インクルーシブな柔道」



●2021 年 6 月 24 日 わらしべ会職員対象研修会



「脳性麻痺の子供への柔道」マリーナ先生（クロアチア）



その後、2023 年春にマリーナ先生とそのチームの指導者、練習生、その家族の一行が来日する予定であったが延期になった。そこで今回われわれのほうから訪問し、直接その練習を見るのと同時に情報交換、交流を進めることになった。

マリナー先生と柔道クラブ「Fuji (フジ)」について

- ・マリナー先生の主催する柔道クラブ「Fuji (フジ)」は2012年8月3日に開始された。クロアチアではこのような障害者柔道は初めてである。
- ・クラブには40名の参加者がいる。脳性まひ、ダウン症、知的障害、運動障害、自閉症、関節拘縮、チャージ症候群（難病）などである。
- ・指導者は、運動療法士、柔道コーチ、障害者スポーツ指導者、自閉症の指導者、医師、理学療法士など。
- ・Fujiのメンバーには障害者のある子どもたちだけではなく、障害のない子どもも含まれる。
- ・練習プログラムでは、障害のない子どもが、障害のある子どもの「受け」となり、練習相手となって、お互いのフレンドシップを大切にしている。
- ・Fujiの活動は基本的に無料である。

●マリナー・ドラスコビッチ (Marina Drašković) 先生の経歴

- ・1986年2月21日生
- ・柔道3段。
- ・日本には3度来ている。過去2回は筑波大学、国際武道大学で練習するために。あとの1回は観光。
- ・2011年 ザグレブ大学経営学部卒業。
- ・2014年 障害者レクリエーション・スポーツ指導者プログラムを受講。
- ・2017年 クロアチア・オリンピックアカデミーの柔道指導者講習を受講。
- ・2020年 2年間の理学療法プログラムを修了。

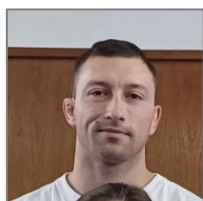


●その他の主な指導者



●サーニャ先生 (Sanja Delladio)

- ・マリナー先生とともに障害者柔道の指導をしている。
- ・競技者であった若いころからマリナー先生とは知り合い。
- ・マリナー先生とともに来日経験あり。



●マルコ・ドラスコビッチ先生 (Marko Drašković)

- ・マリナー先生の弟。
- ・運動療法を専門、職業としていて、肢体不自由児の柔道の基礎的運動プログラムの指導をしているのはこの人。
- ・柔道では国内大会で優勝するなどの実績を持つ。来日経験はない。

視察日程

9月21日(木)	午前	
	午後	14:10 ザグレブ国際空港着 19:00 Dinner ・マリーナ先生、サーニャ先生とともに夕食と日程の確認
9月22日(金)	午前	10:00-11:00 少女のクラス(知的障害) →①
	午後	15:00-15:45 自閉症のクラス →② 15:45-17:00 混合クラス(ダウン症、知的障害、自閉症など) →③
		18:30-19:30 健常の10代から20代のクラス
9月23日(土)	午前	9:30(日本時間16:30) ZOOM 事前収録(担当:西畠、窪田) 10:30 脳性まひのクラス →④
	午後	12:30-13:30 30歳以上の女性のクラス →⑤ 18:00-19:30 脳性まひ者の投げの形の実演、解説 →⑥
9月24日(日)	午前	11:00-12:30 デモンストレーション(スポーツフェスティバル) ・雨天のため当初予定の「屋外デモンストレーション」が中止になり、代わりに夕方に予定されていた10:30-12:00「脳性まひ児に対する運動療法的柔道の解説」→⑦が行われた。
	午後	16:00-17:30 脳性まひ児に対する運動療法的柔道の解説 ・雨天のため予定が変更になり、当プログラムが午前実施されたため中止となった。
9月25日(月)	午前	・市内観光、交流 10:00(日本時間17:00) ZOOM 公開生中継(担当:西畠、窪田)
	午後	・市内観光、交流
9月26日(火)	午前	10:00 マリーナ先生宅にて出発の時間待ちと歓談
	午後	15:10 ザグレブ国際空港発

内容（日程順に各プログラムについて記述する）

① 少女のクラス（知的障害）

- ・参加者は知的障害のある女性6名。10歳～21歳。
- ・この日は平日であったが、「学校は基本的に半日」なのだそうで、この日は午前中が休みで柔道に来て、午後から学校に行くとのこと。
- ・前半は体操教室的な運動が多く、後半に柔道の技の練習が行われていた。



練習後の集合写真



前半の運動のようす。



前半の運動のようす。



ツールを使った足払いの練習。知的障害児・者の指導にはツールを使うと要求される動作が分かりやすい。



寝技の指導。このあと、お互いで交互に抑え込む練習が行われた。



マットを使った投げ込みの練習。足形のシートを置いて分かりやすくしている。

ケース事例

- ・ガブリエラ（19歳）。（右写真中央。向かって右は母親）
- ・柔道を始めて7年。柔道は大好き。ほかにはサッカーをよく見る。
- ・学校は昨年卒業した。現在、平日は「ワークショップ」（作業所のようなところか?）に通っている。
- ・柔道には金曜日に来ている。



② 自閉症のクラス

- ・参加者は自閉症の男性3名（10歳、15歳、17歳）。柔道着を着て柔道に参加できる自閉症のレベルであるが、途中走り出したり、気になることがあるとこだわって同じことをしたり（われわれのカメラを気にして練習中しきりに寄ってきた）ということが見られた。
- ・「集中力がもたない」ので練習時間は45分と他に比べて短め。
- ・2年前からこのクラスを始めた。
- ・いろいろな器具を設置してサーキットトレーニングを行っていたが、自閉症の人に対する支援でよく行われる「構造化」とも考えられ、実際にそれぞれのパートで自主的に運動する場面が見られた。
- ・全体的に、走ったり、全身で体を動かすトレーニングが多く、柔道の技の練習は多くはなかったが、彼らの日常の運動としては十分な運動量であったと思われる。



練習後の集合写真



準備運動の走り込み



マットを利用したの運動と前回り受け身の練習。



道場にそれぞれの器具を置いて、基礎的運動をするサーキットトレーニング。これによって、「どこで何をするか」を分かりやすくするいわゆる「構造化」になっているので、パートによっては指導者がつくことなく、ジャンプや前転などが自主的に行われていた。



「構造化」

自閉症の人に対する支援のひとつで、場所を区切ったり、作業環境を整えることで、「どこで、なにをするか」を分かりやすくし、自閉症の人が自分自身でその課題を取り組みやすくすること。

※写真は「自閉症児のための TEACCH ハンドブック」から引用



最後には打ち込み、マットを使った投げ込みも行われていた。全体的に見ると柔道の技の練習は多くはないが、運動量は多く、自閉症の人たちの日常の運動としては十分である。

③ 混合クラス（ダウン症、知的障害、自閉症など）

- ・通常、2クラスに分けて行っているグループを今回は一緒に実施したため、今回は約15名ほどの参加者。
- ・軽度から中程度の知的障害者でダウン症、自閉症。年齢幅は広く10代から40代くらいの者もいた。
- ・指導者も多く、この日は5名の指導者にアシスタント3名（青の道着を来ている若い女性（写真）でこの道場の健常クラスの練習生）。
- ・このクラスでは、柔道の技の練習も多く、寝技や投げ込みの練習時間も多くとられていた。



練習後の集合写真。集合写真でなかなかそろわないところがこのクラスの障害特性、障害程度を表している。



練習開始のときに円になるのに、自分の位置が分かるように小さい輪を置いて示していた。



正座から立ち上がる時の足の出し方をみんなで練習。輪になって手をつなぐことでまわりを意識しながら行うよう工夫。



受け身の練習



向き合って受け身を取り、先に真ん中の目印をタッチしたほうが勝ちというゲーム的練習。これはわりと各地でよく目にする。



けさ固めの練習。



四つ這いから返すところの練習。



投げ込みのようす

18：30-19：30 健常の10代から20代のクラス

・健常の若い人たちのクラスも日常的に行われている。この日は伊東が入って一緒に練習した。



④ 脳性まひのクラス

- ・参加者は 10 名程度。ほとんどが脳性まひのひとたち。スウェーデンやオランダで見たような片麻痺の人や脊髄損傷などのひとはこのクラスでは見られなかった。
- ・基本的な運動→膝立ちから投げの練習→抑え込みの練習→関節技・締め技の練習→寝技の乱取りの順で行われた。約 1 時間。
- ・準備体操的な「基本的な運動」については、翌日マリーナ先生の弟であり運動療法の専門家であるマルコ先生に説明を受けたのでその項で詳しく述べるが、この運動が投げの安定につながる一連の流れを見れたように思う。デモンストレーションの動画だけでは分からない「土台となる姿勢作り」が入念に行われていた。
- ・車いすや歩行器を利用して移動する人や、親が車から抱えて道場に入って来る脳性まひの人たちが、寝技や膝立ちからの投げの形を練習することによって、いろいろな体の動かし方を学び、また受けによって全身を刺激される様子を目にし、あらためて柔道の価値を見た思いがした。
- ・なによりみんな笑顔である。気持ちよく、楽しそうにしている様子が印象に残った。



練習後の集合写真。みんな笑顔である。



準備体操として、写真のようなお辞儀の姿勢で頭を下げ、体を丸めて、深く呼吸することが指導される。脳性まひの人は、日常、上半身を後ろにそった姿勢をとることが多く、まずはこうして体幹をリラックスしリセットすることから始める。



姿勢づくりの重要なポイントのひとつで、指導者が四つ這いの人の腰骨あたりに手を当てて、左右上下に軽くゆする。脳性まひの練習生は、四つ這いになり、股関節を開いて下腹に息をため、自らの姿勢の安定を保とうとする。



受け身の練習は日ごろ車いすの人が
全身を刺激するのによい。



脳性まひの人は頭を後方にそることが
が多く、後頭部を打つことがあるの
で必要な人にはサポートする。



指導者が下から手を引いてか
らの受け身の練習へと続いて
いく。



膝立ちからの投げの練習を指
導者がやって見せる。



準備運動で意識された下半身の姿勢が、投げたときの姿勢の安定につながっていると思われる。また「投げの形」として行なう時は「受け」は立って行なうが、その前の段階として、受けも膝立ちから行い、かつ投げやすい角度から姿勢を崩さず投げることを練習するなど、ステップを踏んだ練習になっていることが説明された。



上肢の可動範囲が狭いひとや初心者には、一本背負いだけでなくその人に合った投げの練習が行われる。また写真の女性は前の写真の女性に比べて投げたときの下半身がまだやや不安定で、「とんび座り」になって座り込んでいるのが分かる。

「とんび座り」

脳性まひのひとの特徴的な座位の一つで、この姿勢でしか座位がとれない人は股関節や足関節に変形を生じることが多い。



こうした姿勢を改善するため、準備運動では足首に意識を持たせたうえで膝立ちをするなどの指導が行われていた。

投げの練習はこうした姿勢づくりの土台の上に行なわれる。



その後、寝技の練習や締め技、関節技の解説、練習なども行われた。「このクラスの脳性まひの人は知的に低いわけではないので、いろいろな技を知ってもらった方が刺激になっていい。」とのことであった。



練習後の写真。中央の青年は、日常は歩行器を使って移動している。受け身や寝技の練習が、全身の運動の機会になっているようである。



彼女は日常では車いすを利用している。週1回の柔道の練習が、同じく全身の良い運動になっていると思われる。また平日は「データ入力の仕事をしている」とのこと、長時間の車いすでのデスクワークを考えると、その意味でもこうした運動の機会は彼女にとって重要であると思われる。

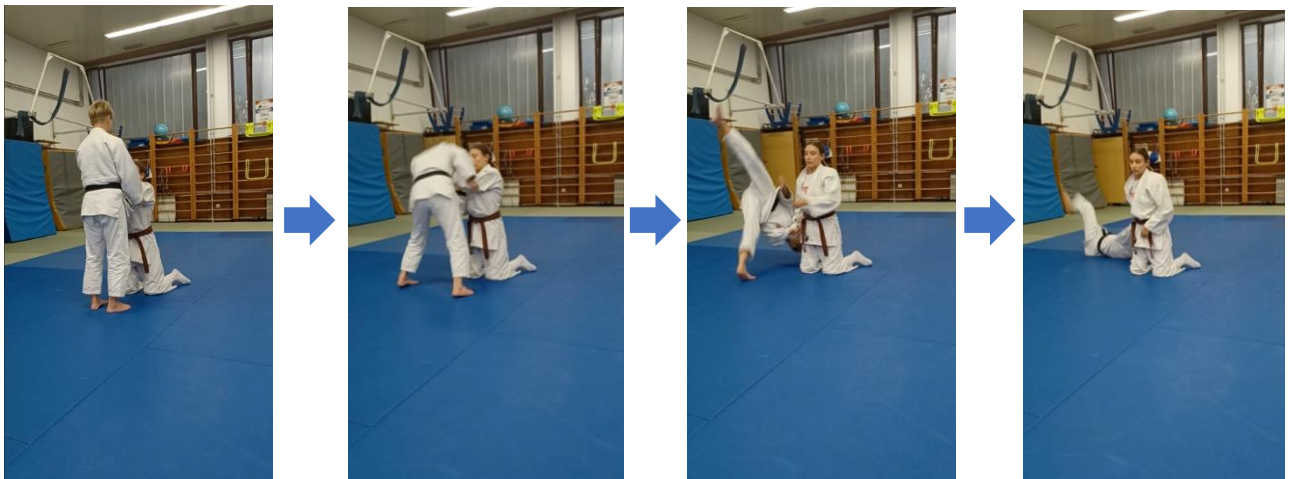
⑤ 30歳以上の女性のクラス

- ・こうしたクラスを設けることで、指導者養成、Fujiの活動理解につながると思われる。
- ・「30歳以上、女性」という限定が当事者にとっては入りやすいのかもしれない。



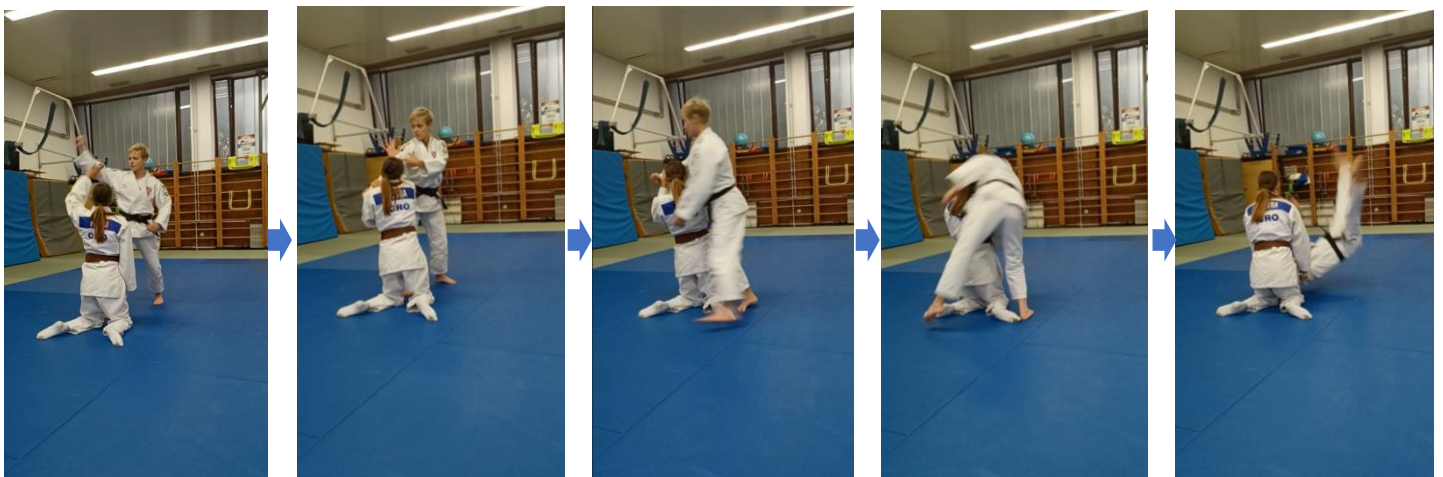
⑥ 脳性まひ者の投げの形の実演、解説

- ・今回特別に公開デモンストレーションなどで中心になっている女性の実演と解説の時間を設けてもらった。
- ・この女性は、視察初日から各クラスで号令などを行っていた人で、聞けばここで長年柔道の練習をし、最近になって指導者の1人としてパートで働くようになったということである。
- ・ほかにも脳性まひのクラスでは、「黒帯を取りたい」「コーチになりたい」という人もいて、3～4名ぐらいはこのレベルにあるとのことであった。
- ・「投げの形」の応用であるが、マリーナ先生は「寝技投げの形」という名称で説明していた。
- ・これまでスウェーデン、オランダでも肢体不自由者の投げの形の実演は見てきたが、それぞれその人の障害に合った形が工夫されていた（後述）。
- ・マリーナ先生は障害者対象の形について、「形の principle（原理、原則）を大事にしたうえで、その人に合わせ（adapted）創意工夫する」ということでとっておられた。
- ・なお、通常投げの形では左右行なうが、このときの解説でも公開されているデモンストレーションを見ても「やりやすい方」のみで行うことも多いようである。
- ・以下に実演と解説のあった主な技について紹介する。



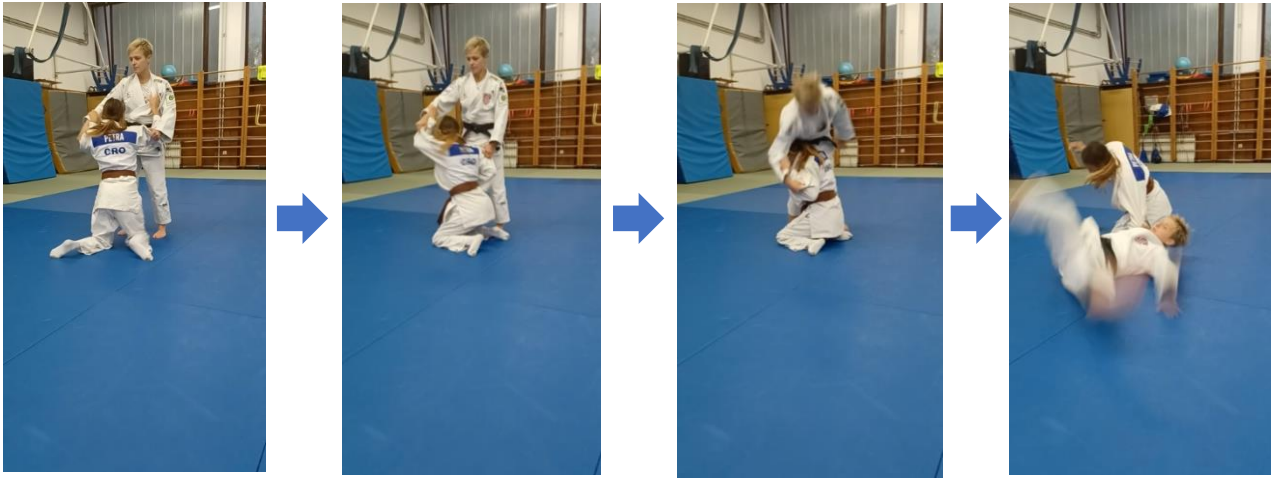
（いわゆる「浮落（うきおとし）」）

一般には片ひざ立ちになって行うのであろうが、脳性まひの人は股関節が硬く、そうした姿勢が難しい。ここでは両ひざ立ちになって移動せずに行うが、先の項でも記載したように下半身の安定に注目したい。



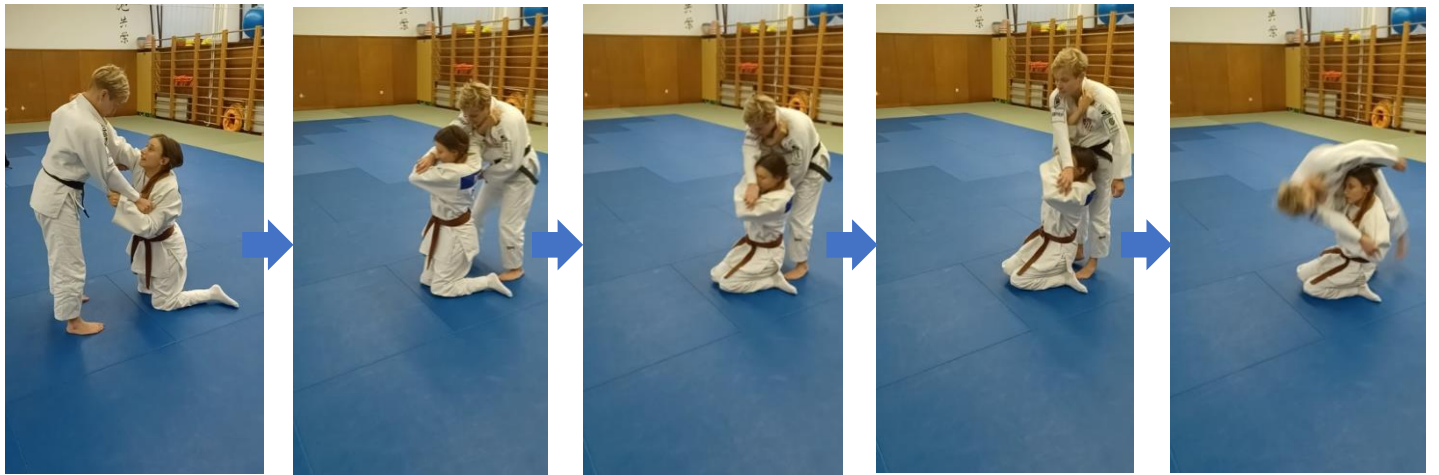
（いわゆる「背負投（せおいなげ）」）

脳性まひ者の取りが膝立ちで回れないので、反対に受けの健常者が回り込んで受け身をとる。ただし、受けがただ回り込むだけでなく、取りがひじの関節をきめることで受けを後ろに誘導する。



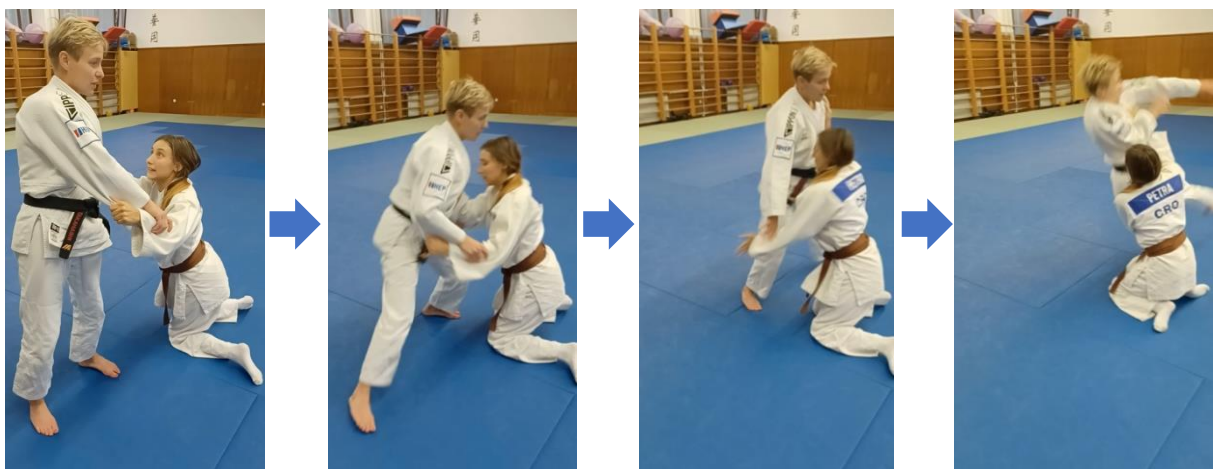
(いわゆる「肩車 (かたぐるま)」)

ここでは取りが回り込んで投げている。彼女の場合は、下半身の身のこなしと上肢の操作が安定した「形」となっている。



(いわゆる「釣込腰 (つりこみごし)」)

これも受けが後ろに回り込む。取りがしゃがみこんで、その後釣り上げてから投げる。



(いわゆる「送足払 (おくりあしばらい)」)

「手」で払う足払い。写真では分かりにくいですが、動画で見ると動きがリズムカルなのが分かる。予備練習として、受けが動かないで何度も行い、取りが安定して投げることを練習する。



(いわゆる「内股 (うちまた)」)
「内股」と同じ要領で、最後は手で払う。

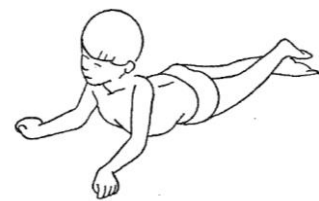


(いわゆる「巴投 (ともえなげ)」)

最後の写真で彼女の下肢の硬直 (つっぱり) の程度が分かるが、こうした制限に関わらずいろいろな技に挑戦している姿がうかがわれた。

(若干の感想と解説)

脳性まひのひとつ、特に痙直型と言われるタイプは下肢が図のようにつっぱりが多く、また股関節も硬い。そのまま成人し筋肉が硬くなると余計に柔軟性がなくなり、加えて車いす上の生活が長くなるので自ら動かす機会も少ない。無理な運動で股関節の脱臼などを招くことに注意しなければならないが、自主的に多様な運動をすることは有益であると思われる。



(若干の感想と解説)

また、この女性のように脳性まひのひとつは、首を大きく後ろに振ることによって全身の運動を誘導することがある。巴投げのような技ではこうしたときに後頭部を打たないように、健常者の指導以上に注意が必要であろうと思われる。

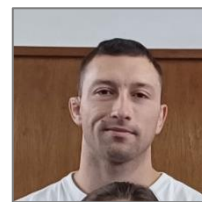
●オランダのティホ氏 (Tycho) などをはじめ、ヨーロッパでは数か所で肢体不自由者の「形」を中心とした柔道が実践されていて、そのようすは Youtube でも公開されている。これまで視察に行った国々では、今回のクロアチアの脳性まひのほか、脊髄損傷、脳血管障害の後遺症による片麻痺のひとなど障害の種別もさまざまで、それぞれの障害種別、程度に応じて形が創意工夫されていた。

<https://www.youtube.com/watch?v=2FEDCw-rLl0>



⑦ 10:30-12:00 脳性まひ児に対する運動療法的柔道の解説

- ・当初、屋外イベントでの柔道デモンストレーションが行われる予定であったが雨天のため中止になり、午後に予定されていたこの時間が繰り上げられる形で実施された。
- ・説明を行ってくれたのは、マリーナ先生の弟のマルコ氏（写真）である。
- ・これまで見てきた脳性まひの人が参加するクラスの準備体操的な基礎運動のプログラムはマルコ氏によって構成され、理論づけられている。これをもとに脳性まひの人が参加するクラスでは姿勢づくりが行われ、技の練習へとつながる一連の練習の流れができています。
- ・キーワードは「大きい動き」「コア・スタビリティ」「姿勢→呼吸→運動、の順で」。土台となる姿勢づくりから、「呼吸」をポイントにしている点に興味を引かれた。
- ・なお今回の説明のために、先に見てきた上肢が比較的動く人と、四肢の動きに制限が大きい人と2名説明の対象として参加してもらっていたため、わらしべ園のような対象者に対しても置き換えてイメージしやすかった。
- ・以下に指導のポイントを示す。



脳性まひの人は全身の硬直のため日常的に体幹が後ろに反っていることが多いで、一度それをゆるめリセットするために頭を下げ背中を軽く丸める。この実演（上）と指導（下）。





おなかに息をためゆっくり吐く「呼吸」を繰り返し、その後、片手を横にして不安定にしても四つ這いが安定するように練習する。この「呼吸」があらゆる姿勢で確認される。

前項で紹介した「脳性まひのクラス」では柔道の技の練習の前にこの姿勢づくりと呼吸が行われる。

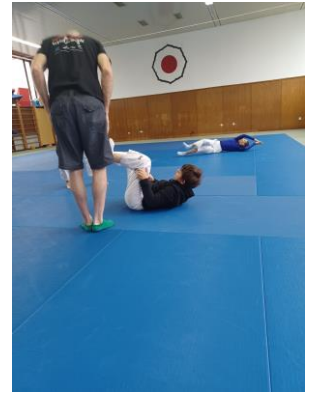


「おなかに息をためて呼吸しているか」の確認は、腰骨の上に手を当ててウエストの横のふくらみを見る。おへそあたりのおなかの上下だけでなく、全体にふくらんでいるかがポイントとのこと。

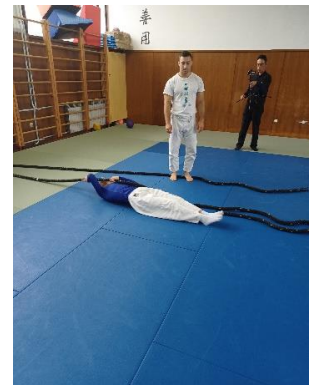


姿勢づくり、呼吸ができれば、片手を横にしたり、伸ばしたりして、3点の支持にしても四つ這いが安定するように練習する。

クッション性のある器具に上肢を乗せて、さらに四つ這いの安定を学習する。



その後、順に胸郭を広げる、まっすぐになって横に転がる、体を丸めるなどを行う。



上肢が比較的柔軟に動くひとには、筋トレに近いさまざまな運動が行われていた。



前項でも紹介した写真であるが、「膝立ち」は両膝だけでなく、両足首を意識した4点で支持すると安定する。その際に、写真のように足首の下ところに手を当てて少し押し上げ、足首で下に押し返すことを意識させるとよいとのこと。この姿勢を確保したうえで、写真（右2枚）のようなトレーニングを取り入れる。

前項の繰り返しになるが、投げの練習の時に見た下半身の安定は、こうした準備運動のもとに成り立っていることがこの時間の説明でより理解できた。





この日の参加者と。実演、解説をしてくれたマルコ氏、および2名の参加者に感謝したい。

この日、行われる予定であったイベントについて

- ・当初この日の午前中に行なわれる予定であった屋外イベントでの柔道デモンストレーションについて、後日それと思われるイベントがFujiのフェイスブックで公開されていたので紹介したい。おそらく延期して実施されたのであろう。
- ・写真から楽しそうな雰囲気が伝わる。
- ・もしこのイベントの見学ができていれば、世間の障害者柔道に対する関心、他の競技との人気の比較などが観察できたであろうことを思うと誠に残念である。





Judo klub osoba s invaliditetom "Fuji"

5日前

...

ヨーロッパスポーツウィークの一環として、今日ヴェリカ・ゴリカでナショナル・スポーツ・デーが開催されました。🙌👏🙌👏

富士チームも多くのゴリカ選手の中で、知識と実力を発表しました! 😊... もっと見る

⚙️ この翻訳の評価



👍❤️ 67

コメント1件・シェア4件

●柔道クラブ Fuji のその他の活動について

マリーナ先生の主催する柔道クラブ Fuji では、柔道の練習以外にさまざまな活動を展開し、障害のある参加者の社会経験の場の提供や、障害者柔道理解のための普及活動を行っている。いただいた資料をもとに紹介しておく。

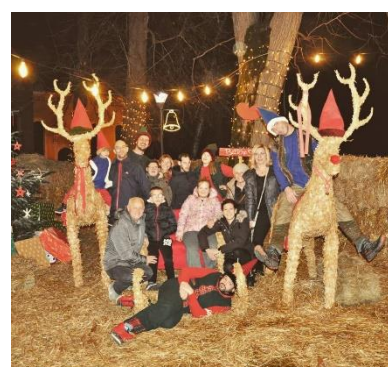
・道場内の大会の開催



・小旅行、遠足



・学年末や季節の交流会



・各地柔道大会でのデモンストレーション



・健常児・者と一緒に練習するインクルーシブ柔道



←寄付団体関係者、幼稚園、他のスポーツクラブなどと。

・練習生や家族に対する講義やワークショップ



←一緒に巻きずしを作ったそうです。

指圧、マッサージを一緒に学んだそうです。→



←スクリーンを拡大してみると「講道館柔道」の文字が見えます。柔道に関する基本的なことを家族や健常の練習生などが座学で学んだようです。



・テレビやラジオなどを通じた活動紹介、普及活動



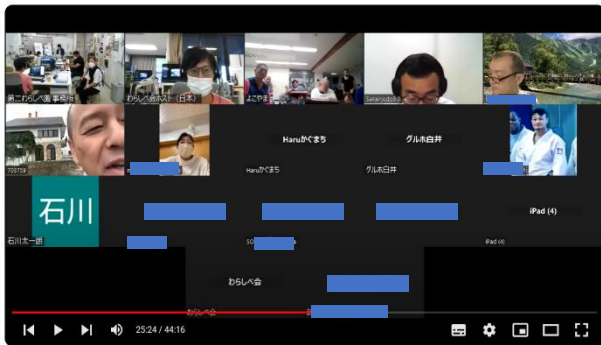
←写真展でしょうか。



←短編動画の製作

現地クロアチアからの ZOOM による生中継

- ・9月25日(月)クロアチアから ZOOM による生中継を行った。現地時間で午前10時、日本時間では午後の5時からのスタートだった。
- ・音声、画像が途切れ途切れになったことは残念であるが、「生中継」で海外からつながっている感覚はかえがたい。多くの方に見てもらえてよかったと思う。
- ・参加者の呼びかけはフェイスブックを通じて行った。



クロアチア中継2023 9 25



クロアチア中継2023 9 25



(写真左上)

- ・法人内の各事業所、および柔道関係者を中心として多くの参加者が集まった。

(写真右上)

- ・2日前に事前に収録したもの。ホテル前からは電波もよくスムーズに行えた。当日の後半に流された。

(写真左)

- ・25日の生中継の実際の現場のようす。日程の都合で車での移動時間になったため車内で行うことにしたが、あまりに途切れ途切れになるため、急遽、車を停めて行った。

日常のスケジュール

- ・道場に掲示してあったスケジュールが以下の写真である。日常的にさまざまな障害のクラスと健常の青少年少女クラスとが実施されていることが分かる。

TJEDNI RASPORED TRENINGA U DVORANI DVD-a (Zagrebačka 3)

PON	UTO	SRI	ČET	PET	SUB	NED
	U15 + O15 GIM 8:30 - 9:30		U15 + O15 GIM 8:30 - 9:30			
		Svaka 2. Srijeda autisti FUJI 10:00 - 11:00		Svaki 2. Petak autisti FUJI 10:00 - 11:00		
					CP FUJI 11:00 - 12:00	
					Krajice 12:30 - 14:00	
	FUJI 14:15 - 15:15		FUJI 14:15 - 15:15			
	FUJI 15:00 - 16:00		FUJI 15:30 - 16:30			
	FUJI 16:00 - 17:00		FUJI 16:00 - 17:00	FUJI 16:00 - 17:00		
U6 17:00 - 17:45	U6 17:00 - 17:45	U6 17:00 - 17:45	U6 17:00 - 17:45	U6 17:00 - 17:45		
U8 17:45 - 18:30	U8 17:45 - 18:30	U8 17:45 - 18:30	U8 17:45 - 18:30	U8 17:45 - 18:30		
U11 18:30 - 19:30	U9 18:30 - 19:30	U11 18:30 - 19:30	U9 18:30 - 19:30	U11 18:30 - 19:30		
U15 19:30 - 21:00	U13 19:30 - 20:30	U15 19:30 - 21:00	U13 19:30 - 20:30	U15 19:30 - 21:00		

脳性まひのクラス

自閉症のクラス

障がいのある人の混合クラス

健常児クラス

考察

最後に考察として、興味をもったところ、話題に出たことを箇条書きでまとめておく。

●脳性まひ以外の多様な障害の受け入れ

これまでマリナ先生の活動の紹介が脳性まひのクラス中心であったが、実際には知的障害、自閉症、ダウン症などのクラスもあり、さまざまな障害の人を受け入れていることが分かった。そして前項で記述してきたように、それぞれの障害に合わせた工夫がされていた。

マリナ先生の実践は肢体不自由者の柔道だけでなく、さまざまな障害のクラスがあることがむしろ特徴的なのだと言える。

●イネスのしごと

週1回柔道の練習に来ているイネス(24歳)は、平日「データ入力のしごと」をしているという。20歳で学校を卒業し、その後、行政の一部署で1日4時間パソコンに向かってのしごとをしている。

今回クロアチアの福祉事情までは調査できなかったが、イネスが就労していることはクロアチアではまれなことらしい。今回の柔道教室で出会った障害のある人たちのなかにも就労能力が高そうな人もいて、こうした人たちが仕事につけているのか、平日どの様なことをして過ごしているのか、通える福祉サービスはあるのかなど興味は尽きない。



●障害者柔道の価値

今回は各クラスの練習メニューに注目し、おもにその紹介にページを費やしたが、障害者柔道の価値はもう少し広い視点、つまり日常生活的あるいは社会的視点などで評価しなくてはならない。「もし彼ら練習生が柔道に参加していなければ、その時間はどのように過ごす選択肢があるのか」「柔道に参加することで、他にどんな社会経験ができたのか」といった視点である。

マリナ先生の柔道クラブ Fuji のフェイスブックなどを見ていると、他国への遠征、交流をはじめ、イベントなどでの形の披露、チームみんなでの合宿などの機会が提供されていることが紹介されている。そしてこうした経験が彼らの自信と社会参加の喜びにつながっているのだと感じる。

健常者に比べて障害のある人は、こうした場面に参加できる機会は絶対的に少ない。障害者柔道の価値は、技の上達だけではないことをあらためて感じた。

●参加費無料と運営費

すべて聞いたわけではないのでかなりの推測が入っていることに留意しながらまとめておく。団体の運営について気になっていたのだが、まず障害者柔道の各クラスの参加者は基本的に無料なのだという。一方、有給のスタッフはマリナ先生ほかパートの指導者、事務員?程度と思われる。

団体の収入源は、企業などからの寄付、行政からの補助金などらしい。行政からの補助金は、障害関係だけでなく、児童福祉関係、スポーツ振興関係など多岐にわたるようである。おみやげにもらったマグカップやノートには星条旗があり、聞けばアメリカ大使館からの寄贈だという。



運営の詳細は、別の機会にゆずりたい。

●普及活動

マリーナ先生の障害者柔道の普及活動について分かっていることをまとめておきたい。具体的に聞けたわけではないので、組織だった計画、戦略として進めているのかどうかは分からないが、分かっている普及活動としては以下のものがあるようである。

・国内外でのデモンストレーション

柔道の国内大会、国際大会のオープニングなどで形の披露をしていて、この一部は Youtube などでも紹介されている。今回の視察のときに雨で中止になった地域のスポーツイベントなどもそうである。広く一般の人に認識してもらう機会となることだろう。

・テキスト作成

具体的な指導について最近テキストが発行された。今回の視察でもいただいた。内容はおもに肢体不自由者の技の指導法である。本来、柔道指導者は障害者支援の専門家ではない。こうしたひとたちが戸惑うのが直接の指導法であり、こうしたテキストの作成が今後の普及の助けになることだろう。



・国を越えた指導者育成

これもときどき SNS で紹介されている情報からであるが、クロアチアだけでなくヨーロッパの各国の障害者柔道の指導者のネットワークを土台に、それぞれの国で指導者講習が行われているようである。



●障害者柔道の待機者 75 名？

何回も聞き返したが、マリーナ先生の障害者柔道教室の待機者リストには 75 名の名前があるという。クロアチアではサッカーがダントツの人気スポーツで、あこがれる障害者も多いと思われるが、サッカーの障害者受け入れはほとんどないようである。

柔道場はザグレブ市内でも 20~30 あるといい、人口比（ザグレブの人口は約 80 万人）にしては多いと思われるが、そこでは障害のある人がいくつかの道場にいるとのことであった。

武道に関しては、柔道以外にテコンドー、空手の教室も人気で、ザグレブ市内には数か所あるとのことであるが、こちらには障害者の受け入れはないようである。

こうしたことを考えると、おそらく一般的にクロアチアではスポーツクラブ、教室に障害者の受け入れは少なく、「障害者柔道クラス」をもつマリーナ先生の道場に集中しているのではないかと思われる。ザグレブ市内から車で 15 分程度のところにあるマリーナ先生の道場に待機者が集中する背景はこのような事情であろう。

なお余談になるが、サッカーについて興味深いことを言っていたので付け加えておきたい。

ある程度動ける知的障害者にとってサッカーは取り組みやすいスポーツであるが、受け入れがたい背景には、クロアチアにとってサッカーは「(選手間の)競争の激しいスポーツ」であることが原因ではないかと言っていた。人口400万人の国が、日本にワールドカップで勝つスポーツなのである。国民の勝敗に対するこだわり、選手間、チーム間の競争の激しさは想像に難くない。競争がはげしくなると、多様性を受け入れる余裕がなくなるといふことか、と思った。



お土産屋さんをはじめあらゆるところに有名サッカー選手のTシャツが売られていた。

最後に

今回の視察の当初の目的は、脳性まひ児を中心とした障害者柔道実践の視察であったが、実際には、①知的障害、自閉症やダウン症を対象とするクラスもあり、対象が多彩であったこと、②脳性まひを中心としたクラスの実践が運動療法的知見に基づいてしっかりとした練習メニューになっていて、そのうえで「形」の練習が行われていたこと、などが分かり刺激のたいへん多い視察となった。

われわれに理解しやすいように、練習日程を若干変更するなどの調整してもらっていたにちがいない。あらためてマリーナ先生と協力してくださった指導者、参加者たちに感謝したい。

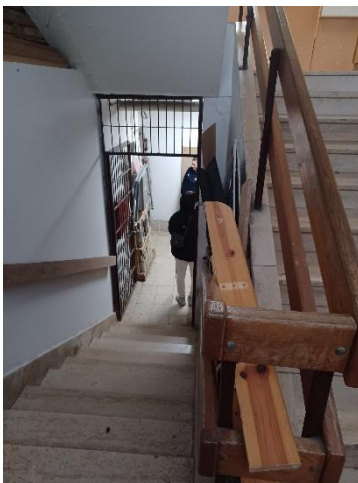
最後に次の視察内容を紹介して、この報告書を終えたい。

視察最終日に道場の地下室へ案内された。そこはかつて空襲避難に使われていたところで、現在は器具が置かれたトレーニング室になっている。窓のない息苦しさを感じる部屋が奥までいくつか続いていた。

旧ユーゴスラビアは1990年代の紛争を越えてそれぞれの国が独立した。その際、クロアチアはセルビアからの空爆を各所で受けたという。マリーナ先生も向かいの幼稚園にいたころ空襲警報があり、なんだかこの避難室に逃げ込んだそうである。「あんな怖い経験は二度としたくないし、子どもたちにもさせたくない。」と言っていた。また、広島原爆記念館に行った時には、「あのときの感覚がよみがえった」という。

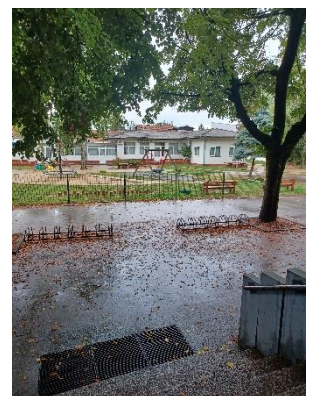
クロアチアでは、30代以上のひとは戦争体験者なのだ。視察の最終日にこの避難室を見せておきたかったのだろう。視察初日から見てきた向かいの幼稚園の子どもたちの遊ぶ声、そのとなりの大学で学生がテーブルで歓談する姿が、かつてはあたりまえの日常ではなかったことに気づかされた。

これからもこの道場で平和に柔道が続けられることを願う。



←柔道場の地下にあるかつての空襲避難室。

道場の向かいは小さな幼稚園。子どもたちの遊ぶ声が広がっていた。→



わらしべ会の障害者柔道について

最後に当わらしべ会の障害者柔道について簡単にまとめておく。なお、詳細については、2021年11月に発行した「わらしべ会障害者柔道の歩み」に記載しているとおりである。

1) わらしべ会障害者柔道の歩み

- ・わらしべ会の柔道療育は、1970年代に法人の開設者であり医師の村井正直（1926～2010）が就学前の脳性まひ児を自身の運営する地域の柔道教室に参加させ、障害児、健常児の隔てなく統合した形で練習を始めたのがその始まりです。そこで村井は、医療的なりハビリテーションでは得られない脳性まひ児の意欲的な運動に着目しました。柔道を通じて、その子らが体力面、健康面、身体能力面の向上を獲得していく様子を目の当たりにし、柔道が身体障害のある子どもらにとって有効なものであることを確信しました。
- ・1981年に成人の身体障害者施設「わらしべ園」（大阪府枚方市）を開設してからは、脳性まひ者だけでなく、脳血管障害による片まひ、高次脳機能障害者など、対象の障害を限定せず施設を利用するさまざまな障害の人との柔道を実践し、身体感覚の回復と身体機能の向上に活用しました。
- ・2010年からは就労支援事業に通う軽度の知的障害者、発達障害者を対象に柔道教室を開始し、体力向上と余暇時間の活用、礼儀の学習に役立てています。最近では全日本柔道連盟が主催するID柔道大会やスペシャルオリンピックスの柔道競技などに参加する機会を得るようになったほか、近隣府県の同じような障害者柔道を実践している団体と交流するようになりました。



2) 海外遠征

- ・これまでイタリア、ドイツの障害者柔道の団体から招待を受け、現地の大会に参加する機会もありました。
- ・その他、スウェーデン障害者柔道、2015 スペシャルオリンピックス世界大会（ロサンゼルス）の視察等を通じ日本のみならず、世界の障害者柔道の情報収集にも努めている。

イタリア（1998年）



ドイツ（2000年）



3) 現在の活動

「知的障害者のクラス」

- ・週1回（毎週土曜日、13：30～14：30）
- ・地域に住んでいる知的障害者対象。約12～13名。
- ・立ち技を中心に稽古しているが、主な目的は運動不足解消と余暇の活動および礼節の学習。